

こしえるびと

つむぐストーリー vol.97

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。
“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”の
メッセージをシリーズで紹介していく。

繁殖農家を絶やさないために

秋の収穫作業が進む山あいにある牛舎で、生後間もない子牛と親牛を1頭1頭、愛情を込めて世話をする鈴木敏さん。子どもの頃は父の勝雄さんが酪農を営んでおり、牛と触れ合いながら成長した。作業の効率化などを狙いに酪農から和牛繁殖へ転換したのは、敏さんが地元を離れた1975年頃。「いつかは長男である自分が引き継がなくては」という使命感と、父から経営を引き継いでいた弟の衛さんの力になりたいという気持ちもあり、長年勤めた警察官を定年前に辞めて就農することを決意した。東日本大震災のため当初の予定よりも1年遅れで就農。手伝い程度だった牛の世話に本格的に取り組むことになった。

肥育農家の信頼のため

敏さんが考える繁殖農家の仕事とは「買手の肥育農家が飼いやすいように管理すること」。そのために牛の個性を尊重して育てることを心掛けていく。「牛にもそれぞれ性格があつて、鳴いて意思表示をする牛もあれば、近寄って来る牛もいる」と言い、牛の健康と性格を把握し、それぞれの牛に合わせた管理をしている。

「この肥育農家に行ってもいいように育てるのが使命だと感じている」とも言い、肥育農家によって異なるやり方に幅広く対応できるように水の飲ませ方、わらや飼料の与え方にも気を付ける。お産が近づいた時や分娩後には、牛に事故がないよう常に気を配る。ストレスを感じず伸びびと、かつ購買者に喜んでもらう

えるような牛の腹づくり、骨格づくりに努めている。

仲間とのつながりを大切に

地域の繁殖農家仲間の減少と高齢化だけではなく、敏さんは獣医の不足も気掛かり。牛のお産の時などは仲間同士で手伝ったり、手伝ってもらったりしているだけに、「牛の分娩時や、万が一の事故が起きた場合に頼るところが少なくなっているのが一番の不安」と話す。厳しい現状と向き合いながら、地域の人たちとの強いつながりを守り、将来のために仲間を増やしたいと思っている。

「毎月、最低でも1頭は市場に出せるようにして経営を安定させ、次世代が引き継いでくれる環境づくりを目指したい」。牛に懸ける思いを胸に歩み続ける。

牛の個性を生かした飼育を目指して

東山町長坂 鈴木敏さん



PROFILE

鈴木敏さん (68)

Satoshi Suzuki

東山町長坂

1954年東山町長坂生まれ。高校を卒業後、日本国鉄東京都南鉄道管理局に就職し、鉄道警察隊に配属。国鉄の民営化に伴い岩手県警察の警察官となった。2012年に退職し繁殖農家として就農。親牛21頭、子牛15頭、水稲20畝、牧草地10畝。母と娘の3人暮らし。

